

中国近代史を読み解く「画報」の魅力を 余すことなく伝える雑誌、待望の復刻!!

本書を推薦いたします(敬称略)

陳祖恩 上海・元東華大学教授

上海の「海派」の文化の真髄にふれる雑誌

上海の文化伝統を特徴づける言葉の一つに「海派」というものがある。この「海派」の文化の真髄は、実は上海の伝統文化と中国国内、または海外からの外来文化の融合と進化によって作られたもので、その一つに広東の外来文化は、上海の「海派」文化を構成する重要な要素の一つであると言える。

上海で最も著名な画報雑誌であった『良友』は、広東人が上海で創立した雑誌であり、上海の新聞出版事業の新たな里程標をなす業績であったとも言える。『良友』画報は、創立から廃刊にいたるまで中国の民族主義と国際主義を理解する様々なニュースの素材を提供してくれる中国で最も影響力が大きかった画報であった。『良友』画報の編集方針は、図版資料の掲載に力を入れ、中国と西洋の優れた藝術、科学、風景、写真に注目し、国内と海外の時事に関連するニュースと著名人の写真を掲載し、文芸と学術に関連する作品をも掲載することであった。『良友』画報の電子版刊行を通して、多くの人々が、中国の都市文化の水脈を理解し、上海の都市文化に直に触れることに期待したい。

Son an-suk 孫安石 神奈川大学・外国語学部教授

上海の『良友』画報から読み解く中国・上海の「大衆消費社会」の到来

第一次世界大戦以降のアメリカは、大量生産と大量消費が可能になり、社会の一部の富裕層だけではなく、多くの労働者が自動車と家電製品を購入し、ハリウッド映画やジャズ音楽を楽しむ「大衆消費社会」を迎えることになった。この大衆消費社会の到来は、上海で発行された英字新聞の The China press や North China Daily News などを通して、アメリカから上海に直に紹介された。そして、これら欧米からもたらされた情報は、上海を代表する新聞の『申報』や『良友』画報などを通して、中国人にも瞬く間に広がることとなる。

とくに、1920～1940年代に中国・上海で刊行された雑誌『良友』画報は、同時代の中国人の都市生活の一端を窺わせる貴重な記事を写真とともに掲載している。上海の映画館で上映されたハリウッド映画はいうまでもなく、美術分野では油絵による西洋画の技法が紹介され、音楽では五線譜とジャズ音楽が、そして、スポーツ分野ではサッカーと野球、そして、オリンピックゲームに参加した中国の選手団を取り上げる特集号などが発行された。まさに、中国に到来した「大衆消費社会」の幕開けであった。

今回の『良友』画報の電子版の刊行によって、多くの読者が中国・上海に到来した「大衆消費社会」の様相と当時の人々の日常生活の一端を垣間見る機会が増えることを期待し、ここに推薦するものである。

森平 崇文 立教大学・外国語教育研究センター教授

中華民国時代の中国を知るための第一級の史料

『良友』画報が刊行されていた1920年代から1940年代は、まさに上海でモダニズムが開花した時代であった。『良友』画報に掲載されている記事、写真、美術作品は言うに及ばず、タイトルのネーミングやロゴ、誌面のレイアウトから広告記事の宣伝文に至るまで、『良友』画報からは20世紀中国におけるモダニズムを随所に感じる事ができ、それだけでも十分誌面を眺めてみる価値がある。さらに『良友』画報には当時の国際情勢、政治、経済、社会、文化、生活、スポーツなど、ありとあらゆる情報が掲載されており、中華民国期の政治外交史、経済史、社会史、文化史等の専門分野を研究するものにとって第一級の史料となる。特筆すべきは、当時の上海をはじめとする沿海地方の都市部に暮らす読者にとって未開の地というべき中国西北地方に関する様々なレポートで、その写真や記事は今となっては民俗学や文化人類学の史料としても貴重であろう。

『良友』画報というと生活や映画に関する柔らかい記事も多いが、決してそればかりではない。例えば満州事変前後から第一次上海事変には、ボクサーのファイティング・ポーズの写真のため、一見するとスポーツ記事のように見えるが、その隅に共闘を呼びかけるようなキャプションが付けられており、同誌編集部からの政治的メッセージと読みとれる記事も散見される。『良友』画報電子版の刊行により、このような記事に対するリテラシーがさらに高まることを期待したい。